
IS インフィニット・ストラトス ~ 暁の空 ~

オールド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス ～暁の空～

【Nコード】

N5484Q

【作者名】

オールド

【あらすじ】

女性にしか反応しない世界最強の兵器『インフィニット・ストラトス（IS）』の出現後、男女の社会的パワーバランスが一変し、女尊男卑が当たり前になってしまった時代。織斑一夏は男性なのにISを起動させてしまい、IS学園に入学させられる。一夏がIS学園に入学した次の日、一人の男がIS学園に入学した。その男は一夏同様ISを機動させることができ、しかも行方不明になっていた一夏と篤の幼馴染だった！二人の男とIS学園の女性たちの物語が始まる。

ブログ（前書き）

これは私の初投稿作品です。未熟なため至らぬ点が多いと思います
が、日々精進していきますので、これからよろしく願います。

ブローグ

空港にある巨大なテレビには数人の女性が写っており、最近の政治について激しい討論をしている。

その討論から急に画面が切り替わり、一人の女性アナウンサーが写る。

「今放送している番組を中断して、緊急ニュースを放送します。現在行方不明である篠乃之博士から声明が発表されました。今からその声明をながします。」

「はい、現在絶賛行方不明中の天才、篠乃之束です！最近『世界で唯一ISを使える男』というのがニュースになってるけど、ISを使える男の子はもう一人いるんだよねー、実は！それで、その子をIS学園に入学させることにしたから。あ、でもね、その子に何かあったら絶対に、ぜーったいに二度とコアを作らないから、そのつもりでよろしくー。それじゃあねー。」

この声明が事実だとすれば、世界に二人ISを使える男がいることとなります。現在IS学園に各国からの問い合わせが殺到しているとのこと。以上で緊急ニュースを終了します。引き続き番組をお楽しみください。」

画面が先程の討論に切り替わった。

空港のロビーで緊急ニュースを見ていた一人の男が呟く。

「わざわざ声明を出さなくてもいいのに、束さんは相変わらずよくわからないな。」

そして、カバンを背負いなおし空港の入り口に向かう。

「タクシーに乗って駅まで行って、それから電車でIS学園まで行かないといけないんだったな。だいたい二時間くらいか？」

確認するように言い、入り口を出てタクシー乗り場に行き、タクシーに乗り込む。

タクシーの運転手に最寄りの駅に向かうように伝えて、座席に深く座りこんだ。

「千冬さんに一夏、それに篝の三人は元気かな。」

自分の幼馴染とその姉の顔を思い浮かべながら呟き、眠るために目を閉じた。

プロローグ（後書き）

とりあえずプロローグを投稿しました。次回の投稿は三日後くらいになると思います。私の小説がより多くの人に読んでいただけたら幸いです。

第1話 到着（前書き）

前回の後書きの予告を守れず申し訳ございません。短い文章ですが、お楽しみください。

第1話 到着

「ここがIS学園か」

俺はIS学園の正面ゲートから学園内に入って立ち止まり、学園内を見渡してみる。

初めて入って来た人は確実に迷うな。

そんなことを思いながら、歩いていると学園の校舎の入口に見知った顔を見つける。

「お久しぶりです。千冬さん」

「ああ。6年ぶりだな。ISを使える男というのは、やはりお前ことだったか」

「はい。そうですよ」

この人は織斑千冬さん。俺の幼馴染織斑一夏の姉で会うのは実に6年ぶりになる。

「入学式に出れないのは仕方ないが、二日目は遅刻せずに来い」
「パンツッ！」

「頭を叩かないでくださいよ。俺だって昨日束さんに

「いっくんがIS学園に入学したから、かーくんも入学してきてね
！」

「って言われて来たんですから」

俺の言葉に千冬さんが呆れたようにため息をつく。

「まあ、いい。とりあえずついて来い。お前には制服とかいろいろと渡さないといけないんでな」

「はい」

俺は返事をして、千冬さんについて行く。

「ああ、それと学園では織斑先生と呼べ。いいな」

千冬さん、訂正織斑先生が振り返りそう言う。

「わかりました。織斑先生」

俺は返事をしつつ、後をついて行った。

第1話 到着（後書き）

今日から二日に一回のペースで投稿しようと思います。応援よろしくお願いします。

第2話 再会（前書き）

第2話は第1話と比べて文章量が多くなっています。また、小説の書き方も少し変えています。

第2話 再会

あの後、書類にサインをしたり、制服に着替えたりして、千冬さんと山田真耶先生（さつき職員室で自己紹介をされた）の案内で教室の前に到着する。

俺が入るクラスは一年一組だそうだ。千冬さんに聞いてみたところ、一夏と篤も一組らしい。

「ここで待っている。呼んだら入って来い。」

「はい」

返事をして、千冬さんと山田先生が教室に入って行くのを見届ける。

俺は呼ばれるまでの間、久しぶりに会う幼馴染のことを考えて待つことにした。

side 一夏

「ねえねえ、織斑くんさあ！」

「はいはい、質問しつもん！」

「今日のお昼ヒマ？放課後ヒマ？夜ヒマ？」

昨日の様子見は終わりを告げたのか、山田先生が教室を出るなり女子の半数がスタートダッシュ、俺の席に詰めかける。

今、『もう出遅れるわけにはいかないわ！』とか聞こえたのは、錯覚じゃないんだろうな……。

昨日からいろいろと散々な目にあっているなと思う。

クラス代表を決定するためにセシリアと対戦することになるし、

寮の部屋は千冬姉と同室で休んだ気はしないし、入学初日から大変だった。

束さんが声明で言ってたもう一人の男子がいれば少しは違っただろうけど。

朝食の時に筈に聞いたなら知らないって言うし、いったい誰が来るんだ？

「……………」

俺を囲む集団を少し離れた位置で見ているのが、幼馴染こと筈だ。朝食の時に束さんの名前を出したとたん不機嫌になってしまった。

（筈って束さんのこと、嫌いだったっけ……？）

そう思っている間も女子の早く質問にご答えてという視線が非常につらい。

とりあえず耳に入った質問に答えればいいか。

「千冬お姉さまって自宅ではどんな感じなの！？」

「え、案外だらしな」

「パアンッ！」

「休み時間は終わりだ。散れ」

おお、いつの間に背後に。しかもこのタイミングの叩きはあれか。個人情報ばらそうとしたからだろうか。

それにしても千冬姉ずっとそんな事していると叩きキャラとして印象がつくぞ。いいのかそれで、いいのか。

「さて授業を始める前に転校生を一人紹介するぞ。」

そんなことを考えていると千冬姉がそう一言言った。

「あ、あの、もしかして篠ノ乃博士が声明で言っていた男の子ですか？」

クラスがざわつく中、クラスメイトの一人がうれしさを抑えきれない様子で質問する。

「その通りだ。とある事情により入学式に間に合わなかったため、今日から通うことになった。」

千冬姉の言葉にさらにクラスがざわつく。

「馬鹿ども、静かにしろ。転校生入ってこい」

千冬姉に怒られ、クラスが静まる中、教室のドアから入ってきたのは行方不明になっていた幼馴染だった。

side out

待っている間に誰かが叩かれた音が聞こえたけど、たぶん一夏が叩かれたんだろうな。

「馬鹿ども、静かにしろ。転校生入ってこい」

千冬さんの呼ぶ声が聞こえたし、教室に入るかな。

俺がドアを開けて教室に入ると、クラスメイト全員（一組の男女を除外する）が驚きの表情をしていた。

その除外した一組の男女、一夏と箒は信じられないものを見るような顔をしてる。

「転校生、自己紹介をしろ」

「鷹野一騎だ。いろいろと迷惑をかけると思が、これから一年間よろしく頼む」

「一、騎、なのか……」

俺が自己紹介をすると、一夏が先ほどの表情のまま呟いた。

「ああ、久しぶりだな、一夏」

「お前今までどこにいたんだよ。俺や千冬姉がどれだけ心配し

」

一夏が急に立ち上がり怒鳴るように言ったが、

パンツ！

「席に着け、馬鹿者。それと、織斑先生と呼べ」

「……わかりました。織斑先生」

千冬さんに叩かれて、しぶしぶ席に座る。

「鷹野への質問は休み時間にしろ、いいな。鷹野の席は窓際の最後尾だ」

「わかりました」

俺は千冬さんに返事をして席に向かう。

向かう途中に箒のほうに目を向けてみるとまだ先ほどの表情のままでこちらを見ていたが、俺の視線に気づくとすぐさま窓の外に顔をそらした。

顔をそらされたことに少しショックを受けて、俺は席に着く。俺が席に着いたのを確認すると千冬さんが一夏に話しかける。

「ところで織斑、お前のISだが準備まで時間がかかる」

「へ？」

「予備機がない。だから、少し待て。学園で専用機を用意するそう
だ」

「????」

なんでいきなり一夏のISの話になるのかわからず首をかしげると、教室がざわめいた。

「せ、専用機！？一年の、しかもこの時期に！？」

「つまりそれって政府からの支援が出てるってことで……」

「ああ。いいなあ……。私も早く専用機欲しいなあ」

一夏が全く意味がわからないという様子でいると、見るに堪えかねたという感じで千冬さんがため息混じりにつぶやく。

「教科書六ページ。音読しろ」

「え、えーと……『現在、幅広く国家・企業に技術提供が行われているISですが、その中心たるコアを作る技術は一切開示されていません。現在世界中にあるIS467機、そのすべてのコアは篠ノ之博士が制作したもので、これらは完全なブラックボックスと化しており、未だ博士以外はコアを作れない状況にあります。しかし博士はコアを一定数以上作ることを拒絶しており、各国家・企業・組織・機関では、それぞれ割り振られたコアを使用して研究・開発・訓練を行っています。またコアを取引することはアラスカ条約第七項に抵触し、すべての状況下で禁止されています』……」

「つまりそういうことだ。本来なら、IS専用機は国家あるいは企業に所属する人間しか与えられない。が、お前の場合は状況が状況なので、データ収集を目的として専用機が用意されることになった。

理解できたか？」

「な、なんとなく……」

教科書にはそう書かれているが実際は違う。俺のISを含めればISは世界に468機存在しているし、コアも俺のISを作るときに新しく作ったものを使っている。

「あの、先生。篠ノ之さんって、もしかして篠ノ之博士の関係者なんでしょうか……？」

女子の一人がおずおずと千冬さんに質問する。

その質問に俺は少し驚いた。てっきり入学初日にバレていると思っていたんだが……。

そう思いながら、筈の方に顔を向ける。

「そつだ。篠ノ之はあいつの妹だ」

千冬さんが質問を肯定すると、クラスが驚きの声に包まれる。

「ええええーっ！す、すごい！このクラス有名人の身内が二人もいる！」

「ねえねえっ、篠ノ之博士ってどんな人！？やっぱり天才なの！？」

「篠ノ之さんも天才だったりする！？今度ISの操縦教えてよっ」

一気に筈の元にわらわらと女子が集まる。

実際の姿を見ていないからこれだけ人気があるんだろうな。束さんの生活態度を見ていれば、ただの引きこもりにしか見えないのに。

「あの人は関係ない！」

突然の大声に簾に群がっていた女子は、何が起こったのかわからない様子をしている。

「……大声を出してすまない。だが、私はあの人じゃない。教えられるようなことは何もない。」

そう言って、簾は一瞬だけ俺の方に顔を向けると、また窓の外に顔を向けてしまう。

女子は盛り上がったところに冷水を浴びせられた気分のように、それぞれ困惑や不快を顔にして席に戻っていった。

（束さんと簾って仲が悪かったか……？）

二人きりの時は知らないが、俺と三人でいた時の仲はそんなに悪くなかったと思う。

「さて、授業を始めるぞ。山田先生、号令」

「は、はいっ！」

山田先生も気になる様子のようにだったが、号令をして、授業を始めた。

（まあ、休み時間にいろいろと説明しないといけないし、その時に聞いてみればいいか……）

そう思い、退屈になるであろう授業を聞き始めた。

第2話 再会（後書き）

まずはじめに、第2話を読んでいただき、ありがとうございます。

読者の皆様にお知らせというかお願いがあります。

作者は素人のため、まだ小説の書き方や文章量など手探りの部分が多くあります。

そのため一話ごとの書き方や文章量が異なる場合があります。

自分の書き方が定まり次第、以前投稿した小説を加筆、修正します。

どのような書き方や文章量が読みやすいのかを感想で書いていただけたら、すべての意見を受け入れることはできませんが、できる限り参考にさせていただきますのでよろしくお願いします。

第3話 説明（前書き）

思っていたより書くのに時間がかかってしまった……。
みなさん第3話をお楽しみください。

第3話 説明

「一騎、今までどこで、何をしていたのかちゃんと説明してもらってからな」

休み時間になると、一夏はすぐさま俺の席に来て俺の肩をつかみそう言った。

「逃げも隠れもしないし、ちゃんと説明するから肩をはなせ」

そう言うで一夏は俺の肩から手を離す。

「織斑君と鷹野君は知り合いなの？」

周りで様子を見ていたクラスの女子の一人が聞いてくる。

「一夏と箒は俺の幼なじみだ」

そう答えると、金髪の偉そうな態度の女子が俺の席に来て、話しかけてくる。

「幼なじみだと言うなら、あなたもこの男と同じで無礼なのでしょうね」

「初対面の相手は無礼と決めつけるほうが、失礼だと思うけどな」

俺がそう返すと、今度は一夏のほうを向き、話しかける。

「それにしても安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとは思

っていなかったでしょうけど」

一夏はどうでもいいという顔をしながら、その女子の話を聞いている。

「まあ？ 一応勝負はみえていますけど？ さすがにフェアではありませんものね」

「？ なんて？」

「あら、ご存じないのね。いいですわ、庶民のあなたに教えて差し上げましょう。このわたくし、セシリア・オルコットはイギリスの代表候補生……つまり、現時点で専用機を持っていますの」

「へー」

「……馬鹿にしていますの？」

「いや、すごいなと思ったただけだけど。どうすごいのかはわからないが」

「それを一般的に馬鹿にしていると言うのでしょうか！？」

ババン！ 両手で俺の机を叩く。叩くのなら自分の机にしてくれないか。

「……こほん。あなたなら専用機持ちがどのくらいすごいかわかりますよね」

「……世界にISは467機しかない。だから、その中で専用機持つものはエリートだとも言いたいのか」

「そうですわ」

俺の言葉に調子を取り戻したのか、腰に手を当ててそう言った。

「一騎、そうなのか？」

「まあ、そう考える人もいるだろうな。俺も専用機を持っているが、

別にエリートだとか、すごいと思ったことはないけど
ババン！

「な、なんであなたが専用機を持っているんですか!？」

一夏に聞かれ、俺が答えると俺の言葉に金髪（めんどいからこの
呼び方でいいか）が反応して机を叩く。

金髪の言葉が聞こえたのか、周りの女子が騒ぎ始める。

「た、鷹野君も専用機をもってるの!？」

「もしかして企業に所属しているとか？」

「どこかの国の代表候補生だったりして!？」

金髪が納得がいけないという様子で聞いてくるが、

「どういうことが説明していただきますわ」

「俺があんたに説明する理由がないな」

俺がそう答えるとキツ、とこちらを睨んだ後、一夏に言い放つ。

「どちらにしてもこのクラスで代表にふさわしいのはわたくし、
セシリア・オルコットであるということをお忘れなく」

金髪、訂正オルコットはぱさつと髪を手で払ってきれいに回れ右、
そのまま立ち去っていった。

俺はこっちを見ていた箒に話しかける。

「箒、久しぶりだな。元気だったか？」

俺が一夏と箒のことを幼なじみだと言った時からずっとこちらを
気にした様子で見ていた。

「…………なぜあの時、私たちの前からいなくなった？」

「それについてもちゃんと説明する。一夏、学食がどこにあるか教えてくれないか？」

「おう、案内するからついてきてくれ」

教室で話をするより学食で、座って話したほうがいいだろう。

「はいはいはいっ！ 私たちも一緒に行つていい？」

俺たちの話が聞こえたのか、女子が集まり聞いてくる。

「久しぶりに会った幼馴染と三人で話したいから、今日は遠慮してくれ」

「それも、そうだな。箒もそのほうがいいよな」

「…………ああ」

俺たちの言葉を聞き、集まった女子が退散していく。

「じゃあ、行くか」

「ああ」

「……………」

俺は一夏の言葉に返事をして、箒は黙ってついてきた。

学食に到着。すごい混んでるが、今朝までと違い男が二人いることに驚いたのか、集まっていた女子がざあつと道をあける。

「一騎、お前は何食う？」

「うーん。あ、日替わりが鯖の塩焼き定食だからこれでいいや」

「お、じゃあ俺も日替わりで。箸もこれでいいよな。何でも食うよなお前」

「ひ、人を犬猫のように言うな。私にも好みがある」

「でも、箸って確か和食が好きだったよな」

「よ、よく覚えていたな……」

「あ、おばちゃん、日替わり三つで。食券ここでいいんですよ？」

一夏はプラスチックの食券をカウンターに置く。俺は箸のほうを向いて言う。

「昔のこととはいえ二年間一緒に住んでたんだから、箸の好みくらい覚えているさ。」

「そ、そうか……」

少し頬を赤くして返事をする箸。やっぱりこついうところは昔から変わらないな。

「はい、日替わり三つお待ち」

「ありがとっ、おばちゃん。おお、うまそうだ」

「うまそうじゃないよ、うまいんだよ」

一夏が恰幅のいい学食のおばちゃんと話している間に席を探す。

「一騎、箒、テーブルどつか空いてないか？」

「向こうのテーブルが空いているから、向こうに行こう」

そう言つと、それぞれ自分の分の定食を手にしたすと歩き出す。
三人がけのテーブルに座り、定食に食べ始める。

「席に着いたし、そろそろ今までどこで何をしていたのか話しても
らうぞ。一騎」

「わかった」

一夏は焼き鯖の身をほぐしながら話し続ける。箒は味噌汁に口を
付けながら、いかにも早く話せという目つきでこちらを見ている。

「とりあえず今までどこにいたんだ？おじさんやおばさんが警察に
頼んで、搜索願出してもらっても見つからなかったのに」

「束さんの所にいたんだよ」

「はあっ！？束さんの所にいたってどういうことだよ。あの人は今
行方不明のはずだろ」

「だからその行方不明中の束さんの所に今までいたんだよ」

「……お前からついて行ったのか？」

「はい？」

今まで黙っていた箒が呟く。

「お前からあの人についていきたいと言ったのか？」

先ほどまでとは違い明らかに怒っているという様子で俺を睨みつ
けてくる。

「あのな、箒。なんで怒っているのか知らないけど、俺から束さんについて行つたわけじゃない」

「じゃあ、なんで私の前からいなくなった!」

「寝ている間に連れて行かれて、目が覚めたら全く知らない場所にいたんだぞ!あの時は俺だつて驚いたんだからな!」

「じゃ、じゃあ、お前からあの人について行つたわけじゃないんだな……」

そう言つと、箒は急に不安そうな表情になり、聞いてくる。

「だから、さつきからそう言ってるだろ」

「そ、それなら別にいい」

箒はうれしそうというのか安心したというのか落ち着いた様子になり、また定食を食べ始める。

「えつと、じゃあ整理すると、一騎は六年前に束さんに拉致られて行方不明になつて、今まで束さんの所にいたけど、俺がIS学園に入学することをニュースで知ったから、IS学園に一騎も入学したということでもいいのか」

「ああ、それでいたいあつてな」

一夏が確認するように言つた内容を肯定する。

「ところで、一夏。お前、クラス代表つてどういうことだ。なんであのオルコットとかいう金髪はお前に突っかかって来るんだ」

「ああ、それは」

一夏からクラス代表を決める際のオルコットとのやり取りを聞き、俺は怒りを覚えた。

「やつぱ、今の世の中ああいう勘違いした馬鹿がいるんだな」
「ああ、ほんとむかつくよな」

「それで、一夏。お前はISについてどのくらい知ってる？」

「何も知らない」

「は？」

開き直った様子で言う一夏に思わず間抜けな表情をしてしまう。

「一夏、お前参考書はどうした？」

「古い電話帳と間違えて捨てた」

「お前そういうところ昔から変わってないな」

俺は昔と変わらぬ一夏の様子に少し呆れつつも安心した。

「それで一騎に頼みがあるんだが、ISのことを教えてくれないか？束さんの所にいたんだったら、ISのことに詳しいだろうし、このままじゃ来週の勝負で何もできずに負けそうなんだ」

「くだらない挑発に乗るからだ、馬鹿め」

「箒、そう言うな。俺だってそこまで言われたら我慢できないさ」

「だから、頼むっ」

一夏が箸を持ったまま、ぱしりと手を合わせて俺を拝んでくる。

「わかった。俺も幼馴染が負けるところを見たくないしな。協力してやる」

「一騎、ありがと。助かったよ」

「今日の放課後」

「ん？」

俺との話がまとまると、篤が一夏に話しかける。

「剣道場に来い。一度、剣の腕がなまってないか見てやる」

「いや、俺は一騎からISのことを教えて」

「見てやる」

「……わかったよ」

その様子には俺は頑固なところは変わってないなと思い、苦笑した。

「どういうことだ」

「いや、どういうことだって言われても……」

時間は放課後、場所は剣道場。ギャラリーが見ている中、一夏は篤に怒られていた。まあ、手合わせを開始してから十分で一本負けすれば当然だよな。

「どうしてこんなに弱くなっている!？」

「受験勉強してたから、かな？」

「……中学では何部に所属していた」

「帰宅部。三年連続皆勤賞だ」

「なおす」

「はい？」

「鍛え直す！　IS以前の問題だ！　これから毎日、放課後三時間、私が稽古をつけてやる！」

「え、それはちょっと長いような

ていうか俺は一騎から

ISのことをだな」

「だから、それ以前の問題と言っている！」

うわあ。すごい怒ってるな。けど、ISのことも教えないとまずいし、止めるか。

「まあまあ、箒落ち着け。確かにここまで剣の腕が鈍っているのは問題だけど、ISの知識が全くないのはさすがにまずい」

「だ、だが」

「じゃあ、こうしよう。放課後一時間は俺がISの勉強を教えて、残りの二時間は箒が剣の稽古をつける」

「……わかった」

まだ納得がいかない様子だったが、なんとかうなずいてくれた。

「ちょっと待て！そこは普通一時間半ずつだろ」

「一夏、お前体を動かすのならともかく勉強で一時間集中力が続くのか？」

「ぐっ！」

一夏が文句を言ってきたが、俺が言うところ突かれた様子で黙る。

「……ふん、軟弱者め」

話が終わると箒は一夏を軽蔑の眼差しで一瞥して更衣室に行つて

しまった。

「織斑くんてさあ」

「結構弱い？」

「ISほんとに動かせるのかなー」

ひそひそと話すギャラリーの落胆した声が、一夏の惨めさをさらに大きくしているように見える。

俺は一夏が決意を新たにしたような顔をしているのを見て、これなら大丈夫そうだなと思い、話しかける。

「一夏、防具を外し終わったら寮まで案内してくれ」
「わかった。少し待ってくれ」

俺は一夏の返事を聞きながら、これから一週間どういう風に教えるか考え始めた。

第3話 説明（後書き）

主人公設定も投稿します。主人公設定が気になっている方はそちらもご覧下さい。

主人公設定（前書き）

第3話と一緒に投稿しました。ネタバレしない程度にしたつもりです。

主人公設定

名前 鷹野一騎 たかのかずき

性別 男

年齢 15歳（入学時現在）

容姿 身長は一夏と同じくらい。耳にかかるくらいの黒髪で目の色も黒。実年齢より大人っぽくみえる。

性格

自分より他人を重んじる性格で、幼い頃に両親を失った経験から、身内が悲しんだり傷ついたりすることを何よりも嫌う。そのため一夏や箒を助ける為になら自分の命ですらも投げ出す覚悟がある。織斑姉弟と篠ノ乃姉妹の4人は名前で呼ぶが、それ以外の人に関しては基本的に名字で呼ぶ。女子のほうが強いとか、偉いと考えている人間が嫌い。

特技 家事全般、剣道（一夏や箒より弱い）

専用IS 『暁』 あかつき

詳細

一夏と箒の幼馴染。両親が篠ノ乃夫婦の親友であり、篠ノ乃家の近所に住んでいた。そのため篠ノ乃道場に通い、剣道を教わっていた。小学2年生の時に交通事故で両親を亡くしており、その後は篠ノ乃家に引き取られお世話になっていた。小学4年生の時に束が失踪する際に拉致られたため、行方不明になっていた。その後、束からI

Sについて学びながら一緒に生活していたため、ISに関しての知識量は同年代と比べてはるかに豊富である。また、束の身の回りの世話もしていたため、家事全般が得意になった。一夏がIS学園に入学したことをきっかけに束が声明を発表したため、一騎もIS学園に入学することになった。

主人公設定（後書き）

第4話の投稿は2月10日になると思います。次回もお楽しみくだ
さい。

第4話 同居（前書き）

一騎と箒にイベント発生！！

さあ、いったいどうなる！？

それでは、第4話をお楽しみください。

第4話 同居

「一夏、とりあえず授業を集中して受ける。授業中に理解できればそれでいいし、理解できなくてもわからないところをはつきりしていれば、そのほうが教える側としても教えやすいからな」

「ああ、わかった」

俺と一夏は剣道場を出て、今後のことについて話しながら寮に向かって歩く。

「あ、鷹野くん。ここにいたんですね。見つかってよかったです」「はい？」

いきなり呼ぶ声が聞こえたので、声が聞こえる方向に顔を向ける。その先には山田先生がメモ用紙つばい紙を一枚、キーを一個持ちながら立っていた。

俺はどうしてこんな時間に山田先生が俺を探していたのか気になり、理由を聞いてみる。

「山田先生、どうしたんですか？」

「はい。えっとですね、寮の部屋を教えていなかったなので、伝えようと思って」

山田先生は俺に説明しながら、持っていたメモ用紙とキーを手渡してくる。

どうやら、メモ用紙は部屋の番号が書かれているようで、『1025室』と書かれてあった。

……そういえば、後で寮の部屋を教えるって言われていたけど、すっかり忘れてたな。

……あれ、そういえば

「一夏はどうしてるんだ？自宅から通っているのか？」

「……俺は千冬姉と一緒にだ」

「……………」

「……………」

「……一夏」

「……何だ」

「……どんまい」

俺は一夏の肩に手を置き、そう言うことしかできなかった。

「じゃあ、これから部屋に行ってくださいね。夕食は六時から七時、寮の一年生用食堂で取ってください。ちなみに各部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間が違いますけど……えっと、その、昨日織斑くんにも言いましたけど今のところ使えません」

「それって女子用の大浴場しかないってことですよね？」

俺は使用できない理由に思い当たり、それを言ってみる。

「は、はい。そうです。織斑くんと同じことを言わなくて良かったです」

「一夏、お前まさか　なんで入れないんですか？　とでも聞いたのか？」

風呂好きの一夏なら言いそうな言葉を言ってみる。

「え、そうだけだ」

「……お前、少しは考えてから発言しろ」

俺たち二人以外全員女子のこの学園で迂闊な発言をしたら、命に関わる事態になるだろう。

「えっと、それじゃあ私は用があるので、これで。二人とも、ちゃんと寮に行ってくださいね」

山田先生はそう言うと、校舎の方に歩いて行った。

寮が目の前に見えている状況で言われても……。どんだけ心配性なんだ？

「そんじゃ一騎、寮に行こうぜ」

「ああ、そうだな」

俺たちは先ほどと同じように話しながら、寮に向かって行った。

寮に到着して、一夏と別れた後『1025室』の前に来た。来たことには来たんだが、

「どう見ても二人部屋だよな」

いつまでも部屋の前にいるわけにはいけないので、とりあえずノックしてみる。

コンコン

返事がない……。同居人が留守の可能性もあるため、仕方なく俺は部屋に入る。

ドアを開いて部屋に入る。すると、目に入るのは大きめのベッド。明らかにそこらへんのビジネスホテルよりいい代物が二つ並んでいる。二つ並んでいるベッドを見て、自分の考えが正しいことを確認する。

となると、問題はその同居人だ。部屋の中にいて着替えている最中だったらかなり気まずい事になっていたが、いないなら問題ない。そこまで考えて俺は自分の考えが甘かったことを思い知らされることになる。

「すまない、シャワーを浴びていて出られなかった。」

ちよつと待った。この声は……。

「こんな格好ですまないな。それで何の用だ？」

「ほ、箒……」

シャワー室から出てきたのは、今日再会を果たした幼馴染の一人だった。

箒は別の部屋の女子が用があつて入ってきたと思ったのか、体に白いバスタオルを一枚を巻いただけの姿だった。

白いバスタオルの面積は色んな意味でギリギリで、その端から下は瑞々しい太腿が露出している。シャワーを浴びていたのを証明するように、つうつ……と水滴が脚線を滑り落ちる。健康的な白さを持った肌が眩しく見える。

その上のくびれた腰はよく鍛えられた体であることをタオルの上からも証明しており、引き締まっただけで、それでいて女性的なラインを主張している。

タオルを押さえている手の下では、束さん程ではないが、かなり大きい胸の膨らみが見える。さすがは姉妹、箒って束さんと一緒に着やせるタイプなんだな。

ここまで考えて、自分の思考世界から現実世界に戻る。

「……………」

お互いその場から固まり、十分にも二十分にも感じる数秒間の沈黙が続く。

「か、か、か、ずき……？」

「あ、ああ……」

俺が返事をするのと同時に、箒はボツと顔を真っ赤にする。束さんと違って、普通の反応をしてくれる箒に少しうれしく思ったが、内緒にしておく。

「……………？ み、見るな！」

「わ、悪い！」

慌てて体を箒の居る方向から、自分の真後ろに向ける。

「な、な、なぜ、お前が、ここに、いる……………？」

真後ろからギギギ……………という音が聞こえてきそうなほど、ぎこちない声で箒が俺に聞いてくる。

「いや、実は俺もこの部屋に住むことになったんだけど」

言った瞬間、真後ろから殺気を感じ、とつさに後ろを向き俺の方
向に上段打突の構えで飛んでくる木刀を真剣白羽取りのように両手
で挟んで止める。

「お、お、お前が、わ、私の、同居人だとい、言うのか？」

「メモ用紙に、書かれていた、番号と、キーの番号、が、この部屋
なんだよ」

箒はこのまま押し切ろうと力をかけてくる状態で話し、俺はそれを必死になって止めながら話す。

「ど、どういっ、つもり、だ」

「何がだ？」

「どういづ、つもりだと、聞いているっ！」

俺と箒は膠着状態で話し続ける。だが、それがまづかった。箒は白いタオルを申し訳程度に体に巻きつけ、木刀を持っている。つまり、その状態で叫んだり、激しく動いたりすれば申し訳程度に巻かれたタオルはすぐさま重力によって、床に落ちるわけで。

「あっ……！」

箒の体を隠していたタオルが落ちるが、両手に木刀を持っているため、抑えることができず、女性からしてみれば羨ましい体のすべてが露わになる。

「ッ
~~~~~  
!!!!」

俺はとっさの出来事で反応できず、顔どころか全身を真っ赤に染めた筈が木刀を振りかぶる姿を最後に、頭に響く爆音によって意識を失った。

#### 第4話 同居（後書き）

気づいている方もいらっしやいましたが、一夏は千冬さんと同じ部屋です。

箒は更衣室で着替えた後、汗を流すために自室のシャワー室に来て、シャワーを浴びているところに一騎が部屋に入ってきてイベントが発生！！

そして一騎は箒の全裸を目に焼き付けて気絶。

このイベントが次回にどのように影響するのか。次回を楽しみにしててください。

## 第5話 試合（前書き）

更新が不定期になると言っただものの、まさか12日間も更新できないとは作者も予想していませんでした。本当に申し訳ございません。

更新を待ち望んでいた方々、第5話をお楽しみ下さい。

## 第5話 試合

俺が目を覚ますと、次の日の朝になっていた。朝の八時前に目が覚めて、遅刻しなかったのは幸いだったとしか言いようがない。

俺を気絶させた張本人の箒は、俺が目を覚ましたことに気づくとすぐさま謝ってきた。さすがに半日以上も気絶するとは思っていないかったらしく罪悪感がわいたらしい。

そして、今日は翌週の月曜日、一夏とオルコットの対決の日。あれから五日間、一夏に俺がISの勉強を、箒が剣道の稽古をみつちりやった。

やることはやったのだから一夏にはぜひとも勝ってもらはなくては困る。

ただ問題があるとすれば、いまだに一夏の専用機が来ていないことだ。

「……………」  
「……………」  
「……………」

俺と一夏と箒は第三アリーナ・Aピットで沈黙している。

「お、織斑くん織斑くん織斑くんっ!」

三度も一夏の名前を読んで、山田先生が駆け足でやって来た。あわててふためいた様子で、転んでもおかしくないなと毎回思う。

「山田先生、落ち着いてください。はい、深呼吸」

「は、はいっ。すっくはっく、すっくはっく」

「はい、そこで止めて」  
「うっ」

この人には冗談が通じないのか？と思っていると、山田先生の顔がどんどん赤くなっていく。

「……………」  
「……ぷはあっ！ ま、まだですかあ？」

というか一夏。お前そんなことをしていると……、  
パンツ！

「目上の人間には敬意を払え、馬鹿者」

「千冬姉……」

パンツ！

「織斑先生と呼べ。学習しろ。さもなくば死ね」

明らかに教師が言うセリフではないな。というか出席簿をここに  
持つてくる必要があるのか？

「そ、そ、それですねっ！ 来ました！ 織斑くんの専用IS！」

「織斑、すぐに準備をしろ。アリーナを使用できる時間は限られて  
いるからな。ぶつつけ本番でものにしろ」

「この程度の障害、男子たるもの軽く乗り越えてみせろ。一夏」

「え？ え？ なん……」

「「早く！」」

「一夏、ボケつとしてる暇はないぞ。急げ！」

山田先生、千冬さん、箒の声が重なった後に、俺も一夏を急かす。  
ごこんっ、と鈍い音がして、ピットの搬入口が開く斜めに噛み合  
うタイプの防壁扉は、重い駆動音を響かせながらゆっくりとその向



こう側を晒していく。

そこに、『白』が、いた。

眩しい程の純白を纏ったISを見て、俺はあるISを思い浮かべる。

『白騎士』。

たぶん、このISには千冬さんと束さんの二人が関わっている気がする。

「これが……」

「はい！ 織斑くんの専用IS『白式』です！」

「体を動かせ。すぐに装着しろ。時間がないからフォーマットとフイッティングは実践でやれ。できなければ負けるだけだ。わかったな」

一夏は千冬さんに急かされて、白式に触れる。

「背中を預けるように、ああそつだ。座る感じでいい。後はシステムが最適化する」

「あ」

「ISのハイパーセンサーは間違いなく動いているな。一夏、気分は悪くないか？」

一夏が千冬さんの言葉通りに、白式に体を任せる。途中で声を上げたが、おそらくハイパーセンサーがオルコットのISを感知したのだろう。

「大丈夫、千冬姉。いける」

「そつか」

うまく隠しているが、千冬さんは一夏をかなり心配してるみたいだな。一夏を名前で呼んでいるのを自分で気づかないほどだし。

「一騎、箒」

「な、なんだ？」

「ん？」

「行ってくる」

「あ……ああ。勝ってこい」

「お前なら勝てるさ、一夏」

一夏に呼ばれて、返事をする、一夏は俺たちの言葉に首肯で応えて、ピット・ゲートに進んだ。そして、ゲートが開放されると、『敵』が待っているアリーナ・ステージへと飛び出して行った。

side 一夏

「あら、逃げずに来ましたのね」

セシリアがふふんと鼻を鳴らす。また腰に手を当てたポーズが様になっている。

けれど俺の関心はそんなところにはない。そんなところには、ハイパーセンサーは感知しない。

鮮やかな青色の機体『ブルー・ティアーズ』。その外見は、特徴的なフィン・アーマーを四枚背に背に従え、どこか王国騎士のような気高さを感じさせる。

それを駆るセシリアの手には長大な銃器

検索、六七口

径特殊レーザーライフル《スターライトmk

？》と一致      が握られていた。ISは元々宇宙空間での活動を前提に作られているので、原則空中に浮いている。そのため自

分の背丈より大きな武器を使うのは珍しくない。

アリーナ・ステージは直径200メートル。発射から目標到達までの予測時間0.4秒。すでに試合開始の鐘は鳴っているので、いつ撃ってきてもおかしくはない。

「最後のチャンスを上げますわ」

腰に当てた手を俺の方に、びつと人差し指を突き出した状態で向けてくる。左手の銃は、余裕なのかまだ砲口が下がったままだ。

「チャンスって？」

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、ボロボロの惨めな姿を晒したくなければ、今ここで謝るというのなら、許してあげないこともなくつてよ」

そう言つて目を笑みに細める。

警戒、敵IS操縦者の

左目が射撃モードに移行。セーフティのロック解除を確認。

ISが告げる情報を、俺は一度飲み込んでから整理する。そうしないと、あつという間に飲み込まれてしまいそうだ。セシリアにも、白式にも。

「そういうのはチャンスとは言わないな」

「そう？ 残念ですわ。それなら」

警告！敵IS射撃体勢に移行。トリガー確認、初弾エネルギー装填。

「お別れですわね！」

Side out

俺たち4人は一夏がアリーナ・ステージに飛び出して行つたのを見送つた後、ピットのリアルタイムモニターから戦闘の様子を見ていた。

モニターからキュインツ！という耳をつんざくような独特の音がすると同時に走つた閃光が一夏の体を撃ちぬく。白式のオートガードによつて守られたみたいだが、痛みがないわけではない。

一夏に弾雨のごとき攻撃が降り注ぐ。一夏は必死になつて避けようとすが、そのすべてが的確に狙つているため避けきれず攻撃を喰らう。

一夏の右腕から光の粒子が放出され、近接ブレードの形となつて手に収まつた。

一夏は攻撃をかわしながら、オルコットとの距離を詰めようとすが、『ブルー・ティアーズ』から外れたフィン状のパーツからレーザーが放たれ、近づくことができない。

それから約30分間。一夏のISはダメージを受け、半分ほど装甲を失つており、実体ダメージが中破と思われる状態になつてしまつた。おそらくシールドエネルギーの残量も100を切つているだろう。

しかし、勝ち目がないわけじゃない。オルコットはまだ自分の方が強いと油断している。あとは、一夏がオルコットの操るピットの弱点に気がつけば勝てる可能性はまだある。

モニターに映る一夏がピットから放たれるレーザーをよけ、一閃。ピットを真つ二つにした。オルコットに向けて、切り込んだあと、続けざまに飛んでくる二機のピットの内、一機のスラスターを破壊

して落とした。

どうやらオルコットの操るビットの弱点に気づいたようだ。それに箒との訓練よって鈍っていた感覚を取り戻したため、集中力も切れていない。

「はああ……。すごいすねえ、織斑くん」

一緒にモニターを見ていた山田先生がため息混じりに呟く。箒も先ほどよりも少し安心した表情をしている。

しかし、千冬さんは対照的に忌々しげな顔をしている。俺も一夏の左手を見て、顔をしかめた。

「あの馬鹿者。浮かれているな。」

「えっ？ どうしてわかるんですか？」

「さっきから左手を閉じたり開いたりしているだろう。あれは、あいつの昔からのクセだ。あれが出るときは、大抵簡単なミスをする。」

「へえええ……。さすがご姉弟ですねー。そんな細かいことまでわかるなんて」

そう千冬さんの言うように、一夏のあのクセが出るときは、簡単なミスをする。そして、そのミスによってほとんど言っているほど負ける。

「ま、まあ、なんだ。あれでも一応私の弟だからな……」

「あー、照れてるんですかー？ 照れてるんですねー？」

「別に照れなくてもいいと思うけどな」

「……………」

ぎりりりりっ。千冬さんが無言でヘッドロックをかけようとして

きたが、山田先生を身代わりにして逃れる。

「いたたたたっ！？」

「私はからかわれるのが嫌いだ」

「はっ、はいっ！ わかりました！ わかりましたから、鷹野君も見てないで、助け                      あうううっ！」

騒いでいる山田先生を無視して、試合開始から無言でずっとモニターを見つめている箒の方に顔を向ける。心なしか、険しい表情をしているが、その表情からは不安な様子が感じ取れる。

「……………」

箒がほんのわずかだけ唇を噛んだ次の瞬間、

ドカアアアンツ！！

爆発音と白い光によってモニターが見えなくなった。

「なっ……………！」

「一夏っ……………！」

俺は箒が思わず声をあげた瞬間、箒の方に向けていた顔を戻し、モニターを見つめる。

さっきまで騒いでいた千冬さんと山田先生も、爆発の黒煙に埋もった画面を真剣な面持ちで注視している。

「                      ふん」

黒煙が晴れたとき、千冬さんが鼻を鳴らした。俺はまだかすかに

漂っている煙の中から光の粒子を見つけ、安堵の表情をする。

「機体に救われたな、馬鹿者め」

「ギリギリだったな」

煙が弾けるように吹き飛ばされ、その中心に真の姿でたたずむ純白の機体がいた。

一夏はオルコットの命令で飛んでくるビットを横一閃で両断する。爆発した次の瞬間、一夏はオルコットに突撃する。

オルコットの懷に飛び込んだ一夏は、光を帯びた日本刀のような刀身の近接ブレードで下段から上段への逆袈裟払いを放つ。それを見て、俺は一夏の勝利を確信したが、次の瞬間決着を告げるブザーが鳴り響いた。

『試合終了。勝者

セルシア・オルコット』

「はあッ!？」

俺はわけがわからず、思わず声を上げてしまった。試合を見守っていた筈と山田先生も声を上げなかったが、「なんで？」という表情をしている。

ただひとり、呆れたように「やれやれ」という表情をしている筈さんを見て、俺は『白式』を見たときに考えたことを思い出す。

もし『白式』に千冬さんと束さんが関わっていて、先ほどの『白式』の装備が『雪片』だとしたら、その特殊能力は

「零落白夜」  
れいらくひやくや

俺の弦きが聞こえたのか、千冬さんが驚いた様子でこちらに顔を向けるが、俺はそれに気づかずモニターに映る『白式』を茫然と眺めていた。

## 第5話 試合（後書き）

今回は一夏とオルコットの試合のため一騎の出番がありませんという事態になりました。

活動報告に書いたとおり次回の更新は未定です。できる限り早く更新しようと思っているので、次回の更新を楽しみにしててください。



## 第6話 決定（前書き）

長い間更新せず申し訳ありません。

第6話を投稿しました。

お楽しみください。

## 第6話 決定

「よくもまあ、持ち上げてくれたものだ。それでこの結果か、大馬鹿者」

試合が終わり、ピットに戻ってきた一夏は千冬さんに怒られていた。

まあ、当然と言えば当然だな。相手の攻撃を喰らって負けたのではなく、自滅して負けたのだから。

「武器の特性を考えずに使うからあなるのだ。身をもつてわかっただろう。明日からは訓練に励め。暇があればISを起動しろ。いいな」

「……はい」

一夏が千冬さんの言葉に頷き、山田先生から分厚い本を受け取る。俺はその様子を見ながら、『白式』について考えていた。

『白式』の武器が、千冬の使っていた武器『雪片』の後継でもある可能性が高い。けど、それは別にたいした問題じゃない。問題は『白式』が『零落白夜』を使った可能性が高いということだ。『零落白夜』を使ったというのなら、先ほど自滅して負けた理由を説明することができる。だが、本来別の機体で同じ単一仕様能力が発現することはない。これは束さん本人から聞いたことだから間違いない。いったいどういうことなんだ？

「何にしても今日はこれでおしまいだ。帰って休め」

千冬さんの言葉が耳に入り、いったん考えるのをやめると篝が近

づいてきた。

「帰るぞ」

箒の言葉に俺と一夏は寮への道のりを歩き始める。

「……………」

「な、なんだよ？」

三人横に並んで歩いていると、箒がじろじろと一夏を見ている。  
慰めの言葉でもかけようとしているのか？

「負け犬」

慰めの言葉どころか、さっき負けてきたばかりの傷をえぐる言葉を一夏に言った。

「箒もそう言ってるなよ。ISを操縦するのが二度目で、しかもフォーマットとフィッティングが終わっていない専用機をぶっつけ本番で操縦したんだ。負けても仕方ないだろ」

「だ、だが、私と一騎が二人で付きっきりで教えてやったのに負けたんだぞ（そのせいで一騎と二人きりになれる時間が少なかったというのに）」

「確かにそうだけど、さすがに一週間じゃあISの基礎の基礎しか教えることができなかったしな」

「ちょ、ちょっと待て！あれで基礎の基礎なのか！」

「あのなあ、一夏。あの分厚い本の量がそう簡単に終わるわけないだろ」

俺がそう言うと、一夏はがっくしと肩を落とした。その様子を見

ながら、一夏に今日負けたことをどう思っているか問い掛ける。

「一夏、今日試合に負けてどう思った？」

「どうって、そりゃ、まあ。悔しいさ」

「そうか。それなら、いいさ」

「何がいいんだよ。俺が負けたことか？」

「違う。俺が言っているのは、負けたことを悔しいと思っていることをいって言うてるんだ」

「は？負けて悔しいと思うのは当然だろ」

「当然といえば当然だが、悔しいと思うのは勝つために努力したから悔しいと思うんだ。全く努力していない奴は思わないさ」

俺がそう言うと、一夏はなるほど、と言って頷く。そして、そのまま急に立ち止まってしまふ。

「一夏？」

「……………」

急に立ち止まり、考え込み始めた様子の一夏に声をかけてみるが、返事がない。

「一夏、いきなり立ち止まってどうしたというのだ？」

「……二人とも、俺にISの操縦を教えてくれないか？」

「頼まれなくても教えるつもりだったが、どうしたんだ？」

「俺が負けて悔しいってのももちろんあるけど、それ以上に千冬姉に恥をかかせたままじゃいられないからな」

俺が一夏に理由を聞くと、なんとも一夏らしい理由が返ってきた。

「わかった。負けたからクラス代表にはならなかったわけだし、時

間はたっぷりあるんだ。しっかりと鍛えてやるよ。箒も協力してくれ」

「わ、わかった。（一騎と二人きりになれる時間がまた減るな）」

「二人とも、ありがとうな」

「とりあえず今日は部屋に戻ってゆっくり休むぞ」

「ああ」

一夏のISの訓練をする約束をして、俺たちは寮に向かってまた歩き出した。

翌日、朝のショートホームルーム。一夏にとってありえないことが起きていた。

「では、一年一組のクラス代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繋がりでいい感じですね！」

山田先生が嬉々として喋っている。そしてクラスの女子が大いに盛り上がっている中、暗い顔をしているのは一夏だけだ。

「先生、質問です」

暗い顔をしている一夏が手を挙げて質問する。

「俺は昨日の試合に負けたんですが、なんでクラス代表になってるんでしょうか？」

「それは」

「

「それはわたくしが辞退したからですわ！」

がたんとイスから立ち上がり、オルコットが言う。昨日までと違い機嫌が良さそうに見えるが、一夏と戦ったことによって考えが変わったのか？いや、それより一夏がフラグを建てたことによって変わった可能性の方が高いか。

「まあ、勝負はあなたの負けでしたが、しかしそれは考えてみれば当然のこと。なにせわたくしセシリア・オルコットが相手だったのですから。それは仕方のないことですわ」

まあ、ISを動かすのが二回目なんだから、一夏が負けるのは当然だよな。

「それで、まあ、わたくしも大人げなく怒ったことを反省しまして、“一夏さん”にクラス代表を譲ることにしましたわやはりIS操縦には実戦が何よりの糧。クラス代表ともなれば戦いには事欠きませんもの」

オルコットが一夏にフラグを建てられたことは確定だな。

「いやあ、セシリアわかってるね！」

「そうだよー。せっかく世界でISを使える男子がいるんだから、同じクラスになった以上持ち上げないとねー」

「私たちは貴重な経験を積める。他のクラスの子に情報が売れる。」

一粒で二度おいしいね、織斑くんたちは」

とりあえず最後に言った子はほどほどにしないとかないと、千冬さんに怒られるだろうから気をつけた方がいいな。

「そ、それですわね。わたくしのように優秀かつエレガント、華麗にしてパーフェクトな人間がIS操縦を教えて差し上げれば、一夏さんもみるみるうちに成長を遂げ  
バンッ！  
」

「結構だッ！」

突然、箒が机を叩いて立ち上がり、オルコットを睨みつけながら言う。

「あいにくだが、一夏の教官は足りている。私と一騎の『二人で』教えると約束したのだからな」

「あら、貴方はISランクCの篠ノ之さん。Aのわたくしに何かご用かしら？」

「ら、ランクは関係ない。私と一騎が頼まれたのだ。そ、それに一騎は専用機持ちなのだから何も問題ない」

「え、箒ってランクCなのか……？」

「だ、だからランクは関係無いと言っている！」

箒がランクCなのは意外だったが、あくまでもランクは今現在の適性を表しているだけだ。これから変わる可能性もあるから、あまり意味がないけどな。

「座れ、馬鹿ども」

すたすたと歩いて行ってオルコットと箒の頭をばしんと叩いた千

冬さんが低い声で告げる。

さすがに千冬さんには逆らえないため、二人はまだ何か言いたそうな顔をしながら座った。

「お前たちのランクなどゴミだ。私からしたらどれも平等にひよつこだ。まだ殻も破れていない段階で優劣を付けるな。代表候補生でも一から勉強してもらうと前に言っただろう。下らん揉め事を私の管轄時間とするな」

バシン！

「……お前、今何か無礼なことを考えていただろう」

「そんなことはまったくありません」

「ほう」

バシンバシン！！

「すみませんでした」

「わかればいい」

一夏が何を考えていたのかは知らんが、千冬さんが叩いたということは千冬さんに関することを考えていたんだろうな。たとえば、千冬さんの生活態度とか。

「クラス代表は織斑一夏。異存はないな」

はいいと（俺と一夏と篤を除く）クラス全員一丸となって返事をした。

俺はとりあえず休み時間になったら一夏を慰めようと心に決めた。



## 第6話 決定（後書き）

前書きで書きましたが、長い間更新せず本当に申し訳ありませんでした。

言い訳に聞こえると思いますが、実はISのアニメを見ていたら、鈴やシャルロットがヒロインの小説案が頭に浮かび、その小説の主人公やストーリーの設定を考えているうちに『暁の空』のストーリーが思い浮かばなくなってしまうました。

言い訳に聞こえるじゃなくて、言い訳にしか聞こえませんかよね。本当にすみません。

次の更新はいつになるかわかりませんが、文庫本を読み返して、ストーリーを再構築しているので、第7話を楽しみにして待っていただけたら幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5484q/>

---

IS インフィニット・ストラトス ~暁の空~

2011年3月13日05時34分発行